



隅に接するが、この不丁という小字名が「府庁」に音通することから、すでに政庁関係施設の存在が想定されていた地域であり、一九七一年の第一七次調査では二間×七間の南北棟礎石建物跡を検出していた。

今回の調査は太宰府市の観世音寺地区土地区画整理事業にともなうもので、不丁地区の西半分約六〇〇〇㎡についてのべ七次におたって実施した。その結果、合計二三棟の掘立柱建物跡を検出し、前述の想定が証明された。現在、東側の日吉地区官衙域に対して、便宜的に不丁地区官衙域と称しているが、政庁前面地区では、広場をはさんで東西の両側に政庁関係施設が並んでいたことになる。なお、これらの掘立柱建物は同時期に併存したものではなく、遺構の重複ないし位置関係などから大きく三期に分けられ、出土遺物から見てこれらはいずれも八世紀代に属し、九世紀前半代には掘立柱建物から礎石建物に移行していったと考えられる。

このような建物跡のほかに、柵・溝・井戸・土壇などの遺構を検出したが、木簡はすべて調査区の東端部で検出した南北溝から出土した。この溝は政庁中軸線から西へ約七二mに位置し、全長は確認できないが、幅が五m前後、深さは一m前後のもので、一部では護岸のための丸杭が打ち込まれていた。おそらく不丁地区官衙域の東限を画するものであろう。またここからの出土遺物はいずれも八世紀前半代に属するものであり、このことからこれは八世紀前半代に

開鑿され、この世紀中葉の天平末年ごろには埋没したと推定される。

出土遺物は各種の土器をはじめ、瓦や陶磁器など多種多様であるが、木簡と同じ溝からは鉄滓・韃羽口・埴埴などの製鉄関係遺物も出土している。また墨書土器の器形はいろいろあるが、硯として使用されたものもある。それらには「久女」「戊寅」「三宅」「膳」「申」「高杯」および「大城」などの文字が墨書され、このほかに判読できないものも数点ある。このうち、「戊寅」を木簡と同時期の干支を示すものとすれば、天平一〇年（七三八）に当たる。また「大城」については、『万葉集』では大野城が築かれた四王寺山のことを大城山と詠んだ例が見られるので（万―一四七四）、あるいは大野城ないし四王寺山を意味するのかもしれない。

#### 8 木簡の釈文・内容

前述のように、木簡はすべて南北溝から出土したもので、総点数は一一四点である。ちなみに調査次ごとの出土点数をあげると、第八三次が三点、第八四次が一点、第八五次が五八点、第八七次が五二点である。このうち第八七次分は年度末に出土したものであり、いまだ整理が完了していないので、ここでは報告を割愛する。

まず、これら六二点について型態的に分類すると、〇一一型式が一点、〇一九型式が一点、〇三三型式が八点、〇三三型式が一点、〇三九型式が一点、〇五一型式が一点、〇六五型式が二点、〇八一型式三〇点そして〇九一型式が七点となる。なお、〇八一型式の

次に、これらに墨書された文字について見ると、少なくとも一字以上を判読できるものは二一点にすぎず、損傷や墨が薄いために判読が困難なものが一二点、わずかな墨痕が見られるのみで、具体的な文字を想定できないものが一九点、墨痕が全く認められないものが一〇点に分類できる。墨痕が認められないものの中には〇三二型式が五点、〇三九型式が二点含まれているが、これらには成形されただけで未使用の可能性の大きいものがあり、大宰府における木簡のあり方を考える上で重要な手がかりを与える資料と言えるだろう。それでは、二一点の釈文をかかげよう。

- |      |   |            |     |
|------|---|------------|-----|
| (5)  | ▽岡賀郡紫草□□  | 137×21×4   | 032 |
| (6)  | ▽岡賀郡紫 <sup>[草力]</sup> □□×   | (116)×23×4 | 039 |
| (7)  | ▽岡賀郡紫×  | (85)×18×5  | 039 |
| (8)  | ▽加麻郡 <sup>[紫力]</sup> □□×  | 120×20×5   | 032 |
| (9)  | ▽夜須郡吉壹張   |            |     |
| (10) | ▽調長大神▽道祖  | 144×24×4   | 031 |
| (11) | 肥前國松浦郡神戶調薄鱧×  | (187)×18×3 | 081 |
| (12) | ×遠賀郡子弟名<br>×料受□師伊福▽<br>×受使▽他田倉千依<br>×受使部三家連安<br>瓦工<br>受呉▽廣野<br>廿一 |            |     |

- [illegible]

さて、出土木簡のうち判読できたものは以上のとおりであるが、これからもうかがわれるように、注目すべき内容をもつものが少ない。以下、若干の補足を行い、それについて述べる。

まず、(1)の表面は腐蝕が著しく、墨は一部を除いてほとんど消えているが、その跡が若干盛り上がっているもので、それによって判読できた。数字はいずれも兵士数を示すものであるが、「人」字が記されていないものがある。内容的には大宰府に上番する兵士に関するものであることは察知できるが、それ以上の具体的なことは明らかでない。天平六年は七三四年に当たり、大宰府史跡出土の紀年銘を有するものとしてはこれが最古のものである。

(3)の「大豆五斗」は異筆で、削りの状況からすれば、これは他に先行するようである。何らかの文書本簡が用済みになって習書用に転用されたとも考えられ、その場合は表裏を反対にみなすべきかもしれないが、なお検討を要する。

(4) (8)はいずれも紫草に関するものであり、ここでは割愛した第八七次調査出土木簡の中にも(4)と同筆同文のものなど紫草に関するものが数点見られ、これらが比較的まとまって出土したことは今回の特徴の一つでもある。周知のように、紫草はムラサキ科の多年草であるが、古来その根は紫色の染料として用いられた。天平九年の『豊後国正税帳』によれば、同国では紫草園が経営され、国司の内巡行一四度のうち三度がそれにかかわるものであり、しかもすべ

て国守みずから巡行し、とくに第二度目は大宰府使の紫草園檢校に同行したものであった。

賦役令では調副物として正丁一人に紫三兩と規定され、また『延喜式』民部上では交易雑物として甲斐国など一〇国に紫草の貢進が課せられているほか、大宰府には五六〇〇斤、さらに年料別貢雑物として日向・大隅両国に合計二六〇〇斤の紫草と大宰府に染造した各種の布帛類の貢進が課せられていた。つまり、大宰府は染料としての紫草を貢進するだけでなく、布帛類を染造してそれを貢進したのであるが、それを担当したのが貢上染物所である。ただ、その名は天長三年(八二六)二月三日の官符に初見されるものであり、職員令にはこれにかかわるような職掌を有する官人は見られず、その存在がいつまでさかのぼるかは明らかでない。またその単位として『延喜式』などの斤兩に対して(4)では根が用いられているが、前者は染料としての紫草を量る単位として、後者はいまだ植物の状態にあるそれを数える単位であろう。

これに見える三郡はいずれも筑前国に属しているが、このうち岡賀郡は遠賀郡と考えられる。『日本書紀』神武即位前紀甲寅年一月甲午条には「岡水門」、『続日本紀』天平一二年九月戊申条には「遠珂郡家」などが見え、『延喜式』民部上では「遠賀」と記されているが、いずれもヲカと訓まれている。管見の限りでは、この岡賀という表記は初見のようであり、岡から遠賀への過渡期における表

記であろうか。なお、「岡」字は異体字を用いている。

(9)の夜須郡も筑前国に属する。賦役令は苦を調副物の一つとしているが、『延喜式』主計上では中男作物とされている。養老元年(七一七)に調副物などを廃して中男作物を課すように改制されているので、この木簡の下限時期はその前後であろう。調長は弘仁一三年(八三二)閏九月二〇日の官符に見える。

(10)の神戸については『新抄格勅符抄』所載の大同元年(八〇六)牒に大宰神封として「田嶋神十六戸肥前国」が見える。田嶋神社は現在佐賀県東松浦郡呼子町加部島に鎮座する式内社であり、確証が存するわけではないが、この神戸がその封戸であった可能性が考えられる。この木簡は文書的であり、おそらくは神祇令という「国司檢校申送所司」にかかわるようなものではないだろうか。

(11)は一種の歴名であり、今回出土木簡の中では異質なものである。これに見える四氏はいずれも周知の氏名であるが、彼らが遠賀郡を本貫としていたとすれば、この木簡は初見史料である。この歴名の分析や表裏の関係など、これについてはなお検討を要する。

(12)は何らかの集計であろうが、具体的なことは明らかでない。(14)の「豊前國」には意味があるようにもみえるが、「豊代」の意味は明らかでない。地名かとも考えられるが、現在までのところでは知られていない。おそらくは(13)や(19)と同じように、習書であろう。

(15)の大野郡は豊後国である。黒葛は、賦役令では調副物、『延喜

式』主計上では中男作物とされ、西海道では肥後・豊前・豊後の三国に課せられている。また前述の弘仁一三年官符には「採黒葛丁国別二人」と見える。

ところで、前述のように、今回出土した木簡ではいわゆる付札類が二〇点あり、これにその原形が付札類ではないかと推定される二点を含めると、全体の三分の一強を占めている点が注目される。大宰府の性格からして、その出土は決して不思議なことではなく、むしろ当然と言うべきことでもあるが、従来の出土傾向ではその占める割合が小さかったので、今回の比較的にとまった出土が目につくかもしれない。出土点数が多いわけではないので、あえて特記するほどのことはないかもしれないが、あくまでも本年度の結果という意味でこのことをあげておこう。

なかでも、ほぼ原形をとどめているにもかかわらず、墨痕は全く認められないものが五点あるが、これは単なる偶然とは考えられない。それらの面はいずれもきれいに削られているので、使用を前提に成形されたことは明らかである。再利用のため表面を削りつつたとも考えられるので、必ずしも断定できるわけではないが、おそらく新品ではないだろうか。墨書を意識して削ったようなものではなく、またいずれも四〇五mmの厚さをもっていることなどからもそのように考えられる。つまり、これらは荷札として大宰府に運び込まれたものが表面を削られて廃棄されたのではなく、もともと大宰府

において付札として用いるために成形されたが、何らかの事情から未使用のまま廃棄されたのであろう。

これは(4)と(8)とも関連する。これらには郡名と物品名およびその数量が記されているにすぎず、このことはこれらが保管や整理のための付札であったことを示唆している。前にも触れたように、(4)と同筆同文のものが見られるし、また厳密に分析したわけではないが、「紫」字は運筆などがきわめて近似しているようであり、これらの木簡は大宰府で作られたとみなしてよいだろう。

## 9 関係文献

九州歴史資料館『大宰府史跡―昭和五十八年度発掘調査概報』  
(一九八四年)

(倉住靖彦)